

【研究ノート】

エコシステム構想における 精神障害者就労・生活支援ツールの意義

御前 由美子

The Significance of Job-Enhancing Tool for People with Mental Disabilities of Ecosystem Projects

Yumiko Misaki



2010年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【研究ノート】

エコシステム構想における精神障害者就労・生活支援ツールの意義

御前 由美子*

The Significance of Job-Enhancing Tool for People with Mental Disabilities of Ecosystem Projects

Yumiko Misaki

要 旨

本稿の目的は、エコシステム構想にもとづき開発した精神障害者就労・生活支援ツールの意義を考察することにある。そのために、エコシステム構想の理論を整理し、臨床現場における利用者とソーシャルワーカーとの参加・協働を通じた精神障害者就労・生活支援ツールの活用を試みている。本稿の構成は、以下のとおりである。

- I はじめに
- II エコシステム構想と支援ツール
- III 精神障害者就労・生活支援ツールの活用による展開
- IV 精神障害者就労・生活支援ツールの意義
- V おわりに

Abstract

The objective of this study is to identify the significance of the job-enhancing tool for people with mental disabilities, which is based on ideas of the ecosystem projects. This paper attempts to review the theory of the ecosystem projects, and to use the job-enhancing tool through participation and collaboration between a client and a social worker in clinical settings.

The table of contents is as follows.

- I Introduction
- II Ecosystem projects and the enhancing tool
- III Development through the use of the job-enhancing tool for people with mental disabilities
- IV The Significance of the job-enhancing tool for people with mental disabilities
- V Conclusion

● ● ○ **Key words** エコシステム構想 ecosystem projects / 精神障害者就労・生活支援ツール job-enhancing tool for people with mental disabilities / 参加と協働 participation and collaboration / フィードバック feedback / フィードフォワード feedforward

* 関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻 学生

I はじめに

2007年度に発表された障害者自立支援領域の文献のなかで最も多かったのは、就労支援に関するものであったとされている¹。また、2009年度からは社会福祉士養成のための教育カリキュラムに障害者の就労支援がとり入れられている。このように、障害者に対する就労支援は、緊急の課題となっている。

現行の障害者自立支援法は、2013年8月までに廃止することが打ち出され、新制度への模索が始まっている。新制度である「障がい者総合福祉法（仮称）」では、これまで支援対象ではなかった発達障害、難病、高次脳機能障害などへの対象拡大、利用料の応能負担といった方針が示されており、当面は、2010年度から低所得者の利用料を無料とする措置の導入が予定されている^{2,3}。

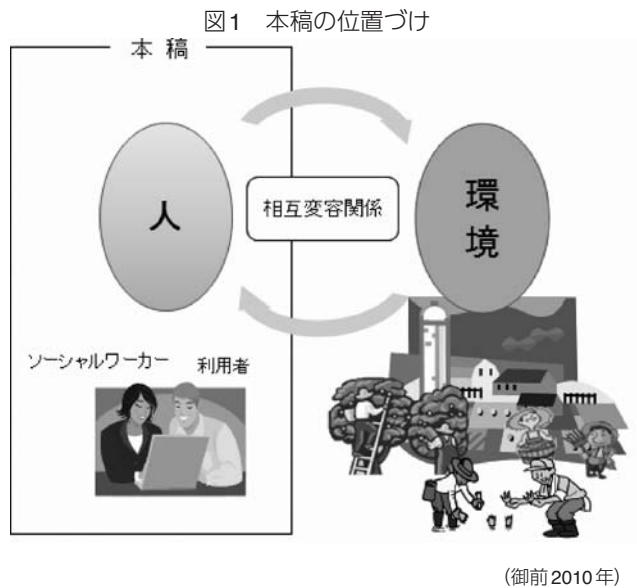
しかし、制度を整備しただけで利用者がしあわせになれるというものではない。現在の就労支援は、経済的自立のための一般就労を目指した制度・政策からのトップダウン的な訓練や職場開拓が中心の断片的なものとなっている⁴。このため、疾病と障害の併存がある精神障害者の特性を生かした就労支援方法が確立されているとは言い難い。精神障害者は歴史的に偏見を受け、自信と意欲を低下させていることが多い。このようなことから、一般就労をする以前に、地域生活を実感できるような支援が必要であると考えている。

就労は、自尊感情の満足や人間関係の拡大をもたらし、自己実現や自己表現につながる、あるいは生きがいをもたらすものとされている⁵。そこで、地域生活を実感するための手段として、就労を活用しようというアイデアが、本研究の土台となっている⁶。そして、このアイデアを実践に生かすためには、人間の生活を人と環境の相互変容関係からなるエコシステムととらえるソーシャルワーク実践が不可欠であると考えているのである⁷。

本稿が立脚するジェネラル・ソーシャルワークには、サービスを創り出すという活動も含まれることから、筆者はNPO法人を設立することによって、環境としての就労場面を創り出し、精神障害者の就労支援活動を行っている⁸。また、ジェネラル・ソーシャルワークでは、コンピュータ支援ツールを活用するエコシステム構想が展開されていることから、この支援ツール

を人に対する支援として役立てようとしている。そして、支援ツールの活用とNPO活動によって人と環境の相互変容関係を生みだし、精神障害者に対する就労支援方法の構築を目指している。

環境としての就労場面における支援や支援ツールの活用と環境の相互変容関係については別の機会に譲ることにし、本稿では、人に対する支援として支援ツールを活用する意義について考察してみたい。図1は、精神障害者の就労支援方法の構築における本稿の位置づけを表している。

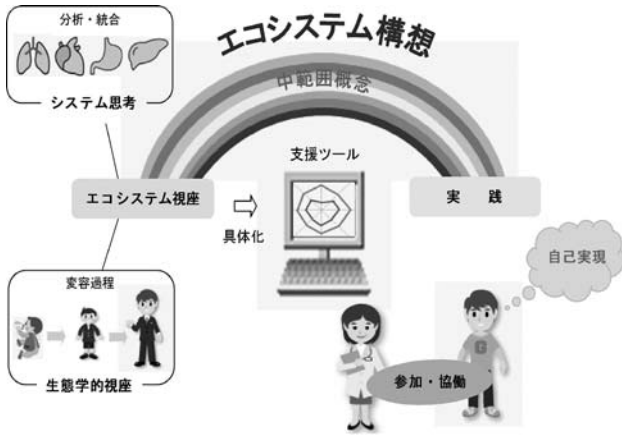


II エコシステム構想と支援ツール

1. エコシステム構想の概念

ソーシャルワークでは、システム思考と生態学的視座を統合したエコシステム視座によって利用者の生活をとらえようとしてきたが、このエコシステム概念は抽象的な説明概念にすぎず、実践に活用することはできないという批判があった⁹。そこで、中範囲概念を用いて理論と実践を統合し、コンピュータによる支援ツールを介在させることによって、利用者とソーシャルワーカーが協働する実践に具体化しようとしている¹⁰。このようなアイデアが、エコシステム構想である。図2は、エコシステム構想の概念を表したものである。

図2 エコシステム構想の概念



(御前 2005年)

図3 基本となる支援ツール画面

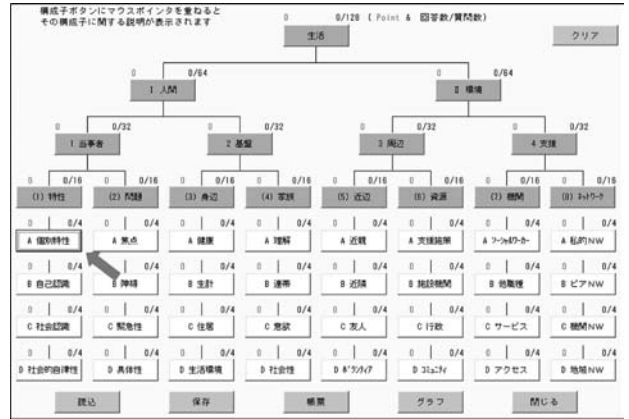


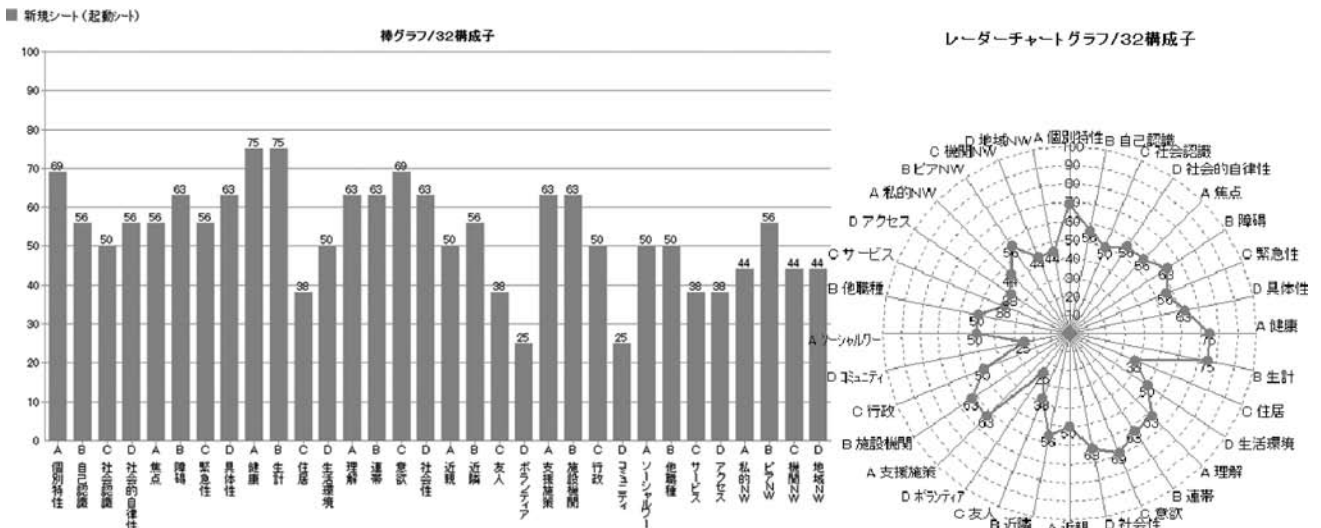
図4 基本となる質問項目画面



2. 支援ツールの概要

支援ツールの詳細については、太田らの著書などを参照頂きたいが、その活用方法について少し説明をしておくことにする¹¹。まず、図3のように生活コスモスの32内容構成子が白く表された画面において、たとえば健康という項目をクリックする。すると、図4のような質問項目が表示される。ソーシャルワーカーは、これらの項目の回答欄をクリックして利用者の生活コスモス情報を入力していく。そして、これを図5のような棒グラフやレーダーチャートで表示することにより、利用者とソーシャルワーカーが、生活コスモス情報として共有することになる。

図5 生活コスモス情報の一例



しかし、このデータは判定を行うためのものではなく、この情報をもとに、利用者が実感する生活とコンピュータに表された利用者の生活との照合を行うという作業が重要となる。この際に不可欠となるのが、コミュニケーションを通じた協働である。なぜなら、利用者の感じている生活と異なるようであれば、ソーシャルワーカーがなぜこのような情報を入力したのか説明することによって、利用者が自分では気がついていなかった部分を発見する場合や、逆に、ソーシャルワーカーが知らなかった情報が利用者から提供される場合もあるからである。このような双方のズレを話し合いながらこの情報は修正されていき、利用者にとっても納得のいく生活コスモスとなるのである。

3. 生活のエコシステム状況理解

ソーシャルワーク実践に用いるツールは、様々なものが開発されている¹²。しかし、この支援ツールは、

「複雑な利用者の生活を、誰もが理解しやすいシンプルな情報に加工し、その情報をもとに支援のプランニングを有効なものにすると同時に、情報を手掛かりに利用者自身による問題解決への積極的な参加を支援しながら、過程を推進することにある。さらに、利用者の生活の変容を追跡することにより、支援効果を合理的に分析することも可能にしようとする」ものである^{13,14}。また、支援ツールを活用するためには情報が必要となることから、このために作成された生活のエコシステム情報が、表1である。

これらの構成子についてであるが、生活コスモスは、秩序だった複雑性をもつ生物体システムとしての開放システムととらえていることから、その要素は相互に影響し合う円環的因果関係をもち、その総和以上になり得るという前提にもとづいている¹⁵。そして、先行研究や事例研究、聞き取り調査を行い、パイロット研究を通じて構成子が抽出されている。

表1 生活のエコシステム情報

生活システム 領域カテゴリー				実践要素の構成 内容情報			1 価値	2 知識	3 方策	4 方法						
全体	領域	分野	属性	内容	態度 機運	姿勢 関心	志向 自覚	現状 内容	事実 関係	実状 理解	制度 施策	政策 見通	計画 私策	取組 活用	対応 協力	参加 努力
				価値意識	状況認識			資源施策			対処方法					
生活	人	I 利用者	特性	[1] A 個別特性	倫理特性	自己への関心	機能特性	自己理解	社会状況理解	社会参加計画	社会参加計画	自己改善計画	社会参加計画	自己改善努力	社会参加努力	社会参加努力
				B 自己認識	社会への関心	社会状況理解	社会参加計画	自己改善計画	社会参加計画	自己改善努力	社会参加努力	社会参加努力				
				C 社会認識	生きがい意識	目的の具体化	目的達成計画	目的達成努力	目的達成努力	目的達成努力						
				D 社会的自律性	問題への関心	問題焦点の実状	焦点への対応策	焦点への取組	焦点への取組	焦点への取組						
	間	II 基盤	問題	[2] A 焦点	問題への関心	問題焦点の実状	焦点への対応策	焦点への取組	焦点への取組	焦点への取組						
				B 障害	障害の自覚	障害の実状	障害改善対策	障害改善努力	障害改善努力							
				C 緊急性	緊急性の自覚	緊急性の現状	緊急への対応策	緊急への取組	緊急への取組							
				D 程度	問題解決の姿勢	問題解決の現状	問題解決計画	問題解決努力	問題解決努力							
	生	III 盤	家族	[3] A 健康	健康への関心	健康の現状	健康の維持計画	健康の維持努力	健康の維持努力	健康の維持努力						
				B 生計	生計への姿勢	生計の現状	生計の維持計画	生計の維持努力	生計の維持努力							
				C 住居	住居への関心	住居の実状	住居の維持計画	住居の維持努力	住居の維持努力							
				D 生活拠点	生活拠点の関心	生活拠点の現状	拠点での支援策	拠点での取組	拠点での取組							
活	IV 周辺	資源	[4] A 理解	家族による理解	家族の役割関係	役割の改善計画	役割改善の努力	役割改善の努力	役割改善の努力							
			B 連帯	家族による連帯意識	連帯の現状	連帯の改善策	連帯回復努力	連帯回復努力								
			C 意欲	家族の支援意識	支援の状況	支援への見通	支援への協力	支援への協力								
			D 社会性	社会への関心	社会との関係	社会参加計画	社会参加努力	社会参加努力								
2 環境	V 支援	周辺	[5] A 近親	近親の姿勢	近親との関係	近親の支援見通	近親の支援協力	近親の支援協力	近親の支援協力							
			B 近隣	近隣の関心	近隣の理解	近隣の支援見通	近隣の支援協力	近隣の支援協力								
			C 友人	友人の関心	友人の理解	友人の支援策	友人の支援協力	友人の支援協力								
			D ボランティア	Vの機運	Vの支援状況	Vの支援計画	Vの参加計画	Vの参加計画								
境	VI 支援	資源	[6] A 支援施策	支援施策の機運	施策の動向	施策の拡充計画	施策の活用展開	施策の活用展開								
			B 施設機関	施設機関の姿勢	機関の実状	機関の支援計画	機関の支援方法	機関の支援方法								
			C 行政	行政の姿勢	行政の現状	行政の推進計画	行政の取組展開	行政の取組展開								
			D コミュニティ	Cの雰囲気	Cの実状	Cの支援計画	Cの参加協力	Cの参加協力								
境	VII 支援	機関	[7] A SWer	SWerの姿勢	SWerの活動状況	SWerの活動計画	SWerの取組	SWerの取組								
			B 多職種	多職種の姿勢	多職種活動状況	多職種の活動計画	多職種の取組	多職種の取組								
			C サービス	機関のSV姿勢	SVの内容	SVの改善計画	SVの展開	SVの展開								
			D アクセス	ACへの関心	ACの状況	ACの改善計画	ACの改善努力	ACの改善努力								
境	VIII 支援	NW	[8] A 私的NW	NWへの関心	NWの現状	NWの改善計画	NWの改善努力	NWの改善努力								
			B ピアNW	NWへの関心	NWの現状	NWの改善計画	NWの改善努力	NWの改善努力								
			C 機関NW	NWへの関心	NWの現状	NWの改善計画	NWの改善努力	NWの改善努力								
			D 地域NW	NWへの関心	NWの現状	NWの改善計画	NWの改善努力	NWの改善努力								

注：SWer はソーシャルワーカー、NW はネットワークの略である。
 出典：太田義弘、中村佐織、石倉宏和『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング
 —利用者参加へのコンピュータ支援—』中央法規出版 2005年 30頁

しかし、その抽出方法についての批判があることは十分承知しており、エコシステム研究会の西梅幸治らによって、これらの構成子の信頼性や妥当性の検証が試みられている¹⁶。詳細については、いずれ報告がなされる予定であることから、ここでは概要のみを述べることにする。

調査は、現場のソーシャルワーカー68名を対象として、日ごろ関わっている利用者のなかから支援ツールの質問に解答できそうな方を想定して、①フェイスシート②支援ツールの質問紙③GHQ（精神健康調査票）④WHO QOL26⑤コメント用紙に記入するという手順で行われた。表2は、属性構成子と内容構成子についてのCronbachのアルファ係数を表したものであり、表3は、GHQとWHO QOL26を用いてPearsonの相関係数を表したものである。

表2 信頼性の検証結果

属性構成子	Cronbachのアルファ	内容構成子	Cronbachのアルファ
特性	.899	個別特性	.751
		自己認識	.304
		社会認識	.755
		社会的自律性	.792
問題	.904	焦点	.715
		障害	.578
		緊急性	.726
		程度	.768
身辺	.871	健康	.791
		生計	.670
		住居	.615
		生活拠点	.216
家族	.959	理解	.846
		連帯	.843
		意欲	.926
		社会性	.933
近辺	.923	近親	.888
		近隣	.926
		友人	.876
		ボランティア	.858
資源	.938	支援施策	.903
		施設機関	.854
		行政	.849
		コミュニティ	.924
機関	.914	ソーシャルワーカー	.829
		多職種	.920
		サービス	.839
		アクセス	.819
ネットワーク	.939	私的ネットワーク	.879
		ピアネットワーク	.899
		機関ネットワーク	.899
		地域ネットワーク	.871

表3 妥当性の検証結果

	支援ツール	WHO QOL26	GHQ
支援ツール	1.000	.269 *	.038
WHO QOL26	.269 *	1.000	-.598 **
GHQ	.038	-.598 **	1.000

* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

**相関係数は1%水準で有意(両側)です。

これらの結果から、表2では0.8以上の係数が多く、おおむね信頼性は得られているのではないかと考えられる。しかし、表3では、0.038と低い係数となっているため、妥当性が得られているとは言いがたい。これは、構成子が生活を包括的にとらえようとするのに対し、GHQやWHO QOL26は生活の一部を測定しているためであろう。そこで今後は、信頼性の低かった構成子の検討や対象者を増やした調査などといった、一般化にむけた試みも検討されている。

しかし、何よりも大切なのは、「利用者」に直接役立つことを最優先することである。この意味では、家族のいない単身者にとっては「家族」という構成子が不要な場合もあるのではないかと筆者は考えている¹⁷。なぜなら、利用者がどんなに努力をしてもデータとして示された生活コスモスの中では家族の部分が広がらないため、意欲が促進されないと思うからである。このようなことから、利用者とソーシャルワーカーが話し合い、必要と思われる構成子を抽出してもよいのではないかと考えている。しかし、支援当初は生活というものに関心がない利用者とのような構成子が必要なのかを話し合うことには無理がある上に、ソーシャルワーカーとしても千差万別の生活コスモスの構成子を利用者ごとに抽出するのは現実的ではないであろう。このようなことから、可能な限り最大公約数的な構成子が抽出されているのである。

4. 支援ツールの活用方法

では、このような支援ツールをどのように活用していくのかを説明しておきたい。

ソーシャルワーカーが入力した利用者の生活コスモス情報について、例えば、利用者Aさんのポイントが20、利用者Bさんのそれが80であったとしよう。この場合、AさんがBさんよりも問題があるととらえるわけではない。なぜなら、周囲から見て問題があるように見えてもAさんが問題と感じていない場合、ソーシャルワーカーがそのことを認識するということが重要なのである。20というポイントはAさん固有のものであり、他人と比較すべきものではない。それよりもAさんのポイントが20から30になることや10になることに意味があるのである。また、ポイントが低い場合、今後上がる可能性や、変わらない場合、努力

によって下がらずに維持できている可能性もある。このようなことから、支援ツールのデータを材料として、利用者とソーシャルワーカーが話し合うことで、変化の要因を検証し、今後の意欲につなげようとするものなのである。この支援ツールの目的が、利用者の傾向を探るためでも標準からの善し悪しを測るためでもなく、前述のように協働を促進することであり、このようなことが利用者に直接役立つ所以である。

では、その特徴はどこにあるのか。それは、前述のように生活を棒グラフやレーダーチャートにビジュアル化できることであり、これが最大の特徴である。データをビジュアル化するものとして、例えば「精神障害者社会生活評価尺度 (LASMI)」がある。これは、結果を五角形のレーダーチャートで表すことによって生活障害の大きさを表し、この面積が広いほどリハビリテーションの必要性が高いことを示している¹⁸。つまりこのビジュアル化は、支援者のためのものであるといえよう。これに対し、エコシステム構想における支援ツールは、利用者が感覚として生活をとらえられるようにすることを目的とし、利用者の実感とのズレをソーシャルワーカーと話し合う材料にするためのビジュアル化であるという点で大きな違いがある。

さらにこの支援ツールは、情報を蓄積できるようになっており、時間経過による生活の広がりを変化として振り返ることも可能である。これは、いわば自動車の燃費計のような役割を果たすことができると考えている。燃費計は、本来は見えないはずの燃費というものを目で見ることができ、現在の燃費状況を知るとともに燃費への関心が生まれるであろう。すると、今よりも一層燃費をよくしようという気持ちが促進され、走り方に注意をはらうことにつながるのである¹⁹。燃費が伸びた場合は、単純にうれしい気持ちになるとともに、高速道路を走ることが多かったのかなどの要因を考える。逆に、燃費が悪くなることや伸びない場合は、渋滞に巻き込まれたためか、あるいはアイドリング状態での停車が長かったためかなど、その原因を考える。このような検証は、それ以後の走り方を変えることにつながっていくであろう。見えないものをビジュアル化することは、このようにプロセスを生みだしていくのである。

つまり、生活の広がり与时系列変化をビジュアル化することにより、目に見えない生活というものへの関

心を利用者から引き出すとともに意欲を促進させ、コミュニケーションを通じた参加と協働によって、利用者とソーシャルワーカーの相互理解や利用者の自己理解、意思決定する過程を支援するアセスメントに役立てようとするものである^{20,21}。そして、くどいようだが、あくまでも一つのツールにすぎないということを忘れてはならないのである。

III 精神障害者就労・生活支援ツールを用いた展開

1. 精神障害者就労・生活支援ツール

現在では、高齢者や知的障害者、精神障害者といったその特性を踏まえたエコシステム情報にもとづく支援ツールが開発されている。そこで、基本となる生活システム²²に準じた構成をもとに、中村和彦や丸山裕子の精神障害者の生活エコシステム情報を参考にし、さらに精神障害者の就労条件に関する個人条件や環境条件の先行研究から精神障害者就労・生活支援ツールを開発している^{23,24,25,26}。表4は、この生活エコシステム情報の内容である。

2. 事例の概要

次に、就労に焦点をあてたソーシャルワークの事例展開を行う。

事例は、筆者が立ち上げたNPO法人で、活動当初から中断することなく参加されているAさんを取りあげる。Aさんは、過去に一般就労をしていたが、就労中に統合失調症を発症したため入院し、その後退職した。以前は病院内のデイケアへ通っていたが、現在は通わなくなっており、病状は安定しているにもかかわらず、ほとんどを自宅で過ごすことが多い。このため、母親は仕事の休みにはAさんを連れてドライブに出かけることが多く、車の走行距離は3年間で8万kmを超えているほどである。しかし、そのほとんどは目的の無いものであるため、母親も疲れ果てている²⁷。Aさんが作業所へでも行って欲すれば少しは気が楽になるのだが、作業所は当事者ばかりで閉鎖的な感じがすると言って、Aさんは、行きたがらないということであった。そこで、作業所ではない本NPO法人活動に参加するようになった。

表4 精神障害者の就労に焦点をあてた生活のエコシステム情報

生活システム 領域カテゴリー			実践要素の構成 内容情報		1 価値			2 知識			3 方策			4 方法		
					態度 機運	姿勢 関心	志向 自覚	現状 内容	事実 関係	実状 理解	制度 施策	政策 見通	計画 私策	取組 活用	対応 協力	参加 努力
全体	領域	分野	属性	内容	価値意識			状況認識			資源施策			対処方法		
生	人	I 利用者	特性	[1] A 自己概念	自己への関心	自己理解	自己理解	自信	自己受容							
				B 目標	目標意識	目標の具体化	目標の具体化	目標達成の見通	目標達成努力							
		C 役割	役割への関心	役割の現状	役割の現状	役割向上の見通	役割向上努力									
		D 社会的自律性	生きがい意識	適応・環境調整状況	適応・環境調整状況	適応・環境調整の見通	支援要請の努力									
		[2] A 生活管理	生活管理への関心	生活管理の現状	生活管理の現状	生活管理向上の見通	生活管理向上の取組									
		B 体力・持久力	体力・持久力への意識	体力・持久力の現状	体力・持久力の現状	体力・持久力向上見通	体力・持久力向上努力									
	C 対人関係	対人関係への関心	対人関係の現状	対人関係の現状	対人関係向上の見通	対人関係向上の努力										
	D 就労意欲	就労意欲への関心	就労意欲の現状	就労意欲の現状	就労意欲向上の見通	就労意欲向上の努力										
	間	II 基盤	身辺	[3] A 健康 (医)	体調管理への関心	体調管理の現状	体調管理の現状	体調の維持計画	体調の維持努力							
				B 生計 (経)	生計への姿勢	生計の現状	生計の現状	生計の維持計画	生計の維持努力							
				C 住居 (住)	住居への関心	住居の現状	住居の現状	住居の維持計画	住居の維持努力							
				D 趣味・娯楽 (遊)	趣味・娯楽への関心	趣味・娯楽の現状	趣味・娯楽の現状	趣味・娯楽の見通	趣味・娯楽の取り組み							
[4] A 理解		家族による理解	家族の役割関係	家族の役割関係	家族役割の改善計画	家族役割改善の努力										
B 連帯		家族による連帯意識	家族連帯の状況	家族連帯の状況	家族連帯の改善策	家族連帯努力										
C 意欲	家族の支援意識	家族の支援意欲の状況	家族の支援意欲の状況	家族の支援への見通	家族の支援への協力											
D 家族NW	社会への関心	社会との関係	社会との関係	社会参加計画	社会参加努力											
活	III 周辺	近辺	[5] A SWer	SWerの意識	SWerの理解	SWerの理解	SWerの支援策	SWerの支援協力								
			B 友人・ピア	友人・ピアの意識	友人・ピアの現状	友人・ピアの現状	友人・ピアの支援策	友人・ピアの支援協力								
			C 近隣	近隣意識	近隣理解	近隣理解	近隣の支援見通	近隣の支援協力								
			D ボランティア	ボランティアの意識	ボランティアの理解	ボランティアの理解	ボランティアの支援見通	ボランティアの支援協力								
	II 環境	資源	[6] A 私的資源	私的資源への関心	私的資源の現状	私的資源の現状	私的資源活用の見通	私的資源活用取り組み								
			B 機関資源	機関資源への関心	機関資源の現状	機関資源の現状	機関資源活用の見通	機関資源活用取り組み								
C 地域資源	地域資源への関心	地域資源の現状	地域資源の現状	地域資源活用の見通	地域資源活用取り組み											
D 施策資源	施策資源への関心	施策資源の現状	施策資源の現状	施策資源活用の見通	施策資源活用取り組み											
境	就労 体制	[7] A 体調配慮	体調配慮への意識	健康の理解	健康の理解	健康への支援策	健康配慮の取り組み									
		B 特性配慮	特性配慮への意識	特性の理解	特性の理解	特性配慮への支援策	特性配慮の取り組み									
		C 参加・協働	参加・協働への意識	参加・協働の理解	参加・協働の理解	参加・協働への支援策	参加・協働の取り組み									
		D 報酬	報酬への関心	報酬の現状	報酬の現状	報酬改善計画	報酬改善の努力									
境	支援 環境	[8] A 担当者	担当者の調整意識	担当者の理解	担当者の理解	担当者の支援見通	担当者の支援努力									
		B 同僚	同僚の意識	同僚の理解	同僚の理解	同僚の支援見通	同僚の支援努力									
		C 就労支援者	就労支援者の意識	就労支援者の理解	就労支援者の理解	就労支援者の支援見通	就労支援者の支援努力									
		D 支援NW	支援NWの関心	支援NW活用の理解	支援NW活用の理解	支援NW活用見通	支援NW活用努力									

注：SWer はソーシャルワーカー、NW はネットワークの略である。

(御前2008年)

【利用者の基本情報】

氏 名：Aさん 男性 29歳
 病 名：統合失調症
 性 格：雨が降ると雷がならないかととても不安になる。また、子供のように母親に甘えるところがある。
 趣 味：ゲーム、パソコン、フィギア収集
 職 歴：あり（事務系）
 家族構成：Aさん、父親、母親と暮らしている。兄は、仕事のために県外に住んでいる。
 住 居：新興住宅地内の一戸建て。すぐ近くには、大型ショッピングセンターがある。
 生 計：家族の扶養。障害年金2級を受給しているが、管理は家族が行っている。小遣いとして月に3万円を渡されているが、そのほとんどをゲームソフトなどに使っている。

活動に参加した当初のAさんは、自信や意欲を失っていたことから、作業に対しても消極的であり、何をするにも「お母さんに聞いてみる」と言っていた。しかし、活動とエコシステム構想による支援ツールを用いた支援展開により、自己を理解し、課題に取り組むようになるとともに、NPOメンバーとの活動や地域住民とのかかわりによって積極的になり、自信や意欲をとりもどしている。このような結果、自分らしい地域生活を送るようになったという事例である。

前述したように就労場面における支援内容の詳細は、別の機会に譲ることから、本稿では、倫理的配慮として利用者の了解のもと、支援ツールを活用したアセスメントでの利用者の様子を中心に述べている。なお、会話での括弧部分は、わかりやすいように筆者が修正したものである。

3. アセスメントにおける A さんの様子 (前期)

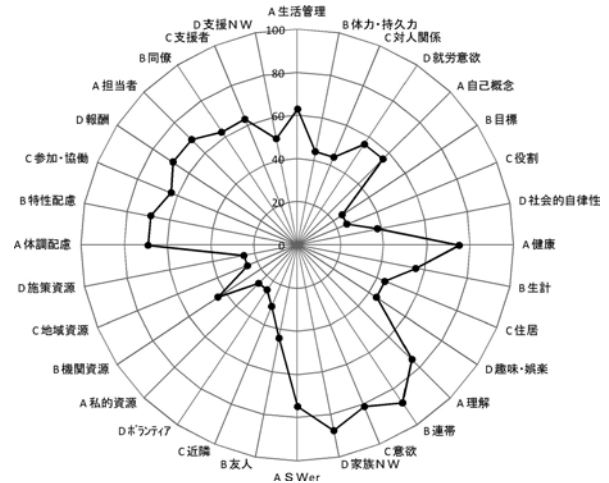
・アセスメント1回目 (2008年11月初め)

家族からの情報や体験参加した際の A さんの様子や会話をもとに、ソーシャルワーカーが、支援ツールの入力を行った。アセスメント時には、支援ツールについての説明を行い、生活を表したデータを示した。

A さんは、「へー。これおもしろいな。これどうなってんの？この項目は？もうちょっと細かく見せて」と大変興味を示しているようにみえた。しかし、ソーシャルワーカーに「このデータと自分の実感とを比べてどうですか？こんな感じだと思いますか？」とたずねられると、「ふーん、こんな感じなんかな？ようわからんわ」と、どこか他人ごとのようであった。そこで、データ表示を棒グラフからレーダーチャートに切り替え、生活は様々な構成子から成り、広がりがあるという説明をすると、A さんは、「ふーん、生活なあ。広がりなあ。今まで生活なんか考えたことなかったからな。いろんなもん (もの) あるんやな」という反応を示した。また、家族についてたずねられると、「お母さんは大好きや。僕のこと一生懸命やってくれる」と大変感謝している。しかし、「僕がこんな病気になってしまった (しまった) からな。ほんま、お母さんかわいそうや。なんで、こんな 病気になってしまたんやろ (しまったんだらう)」と、少し沈んだ表情になる。そして、友達については、関心はあるが、現在、仲の良い友達はいないことが判明する。また、就労に関しては、「今の生活で別にええんやけど。作業所なんかへ行きたくないし。まっ、入院してるよりかはずっとましやから、今のままでもええねんけどね。そやけど、お母さんは何かしたほうがええんと違うかってゆうし、僕も何かはしたほうがええと思うし」と話す。

A さんが興味を持ったのは、自分に関するデータに対してではなく、パソコンへの興味から、ツールの構造に対してのようであった。また、活動に参加するようになったのは、家族の強い勧めがあったからであり、A さん自身は消極的である。そして、現在は、漠然と何かをした方がいいのではないかという思いはあるものの、具体的に何をしたいのかわからず、就労意欲が出ないという状況であることがうかがえた。図6は、アセスメント1回目のデータである。

図6 アセスメント1回目



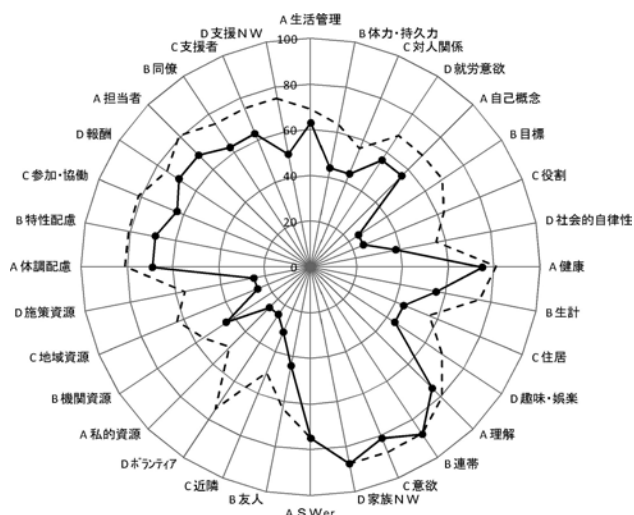
・アセスメント2回目 (2009年3月初め)

当初は、10分ほどすると「休憩してもいいですか？」と言いだすことが多かったため、ソーシャルワーカーが「あと5分だけませんか」「何時になったら休憩しますか？」などの声かけや、メンバーが「ここまでしてしまおうよ」という働きかけを行ってきた。また、A さんが作業しやすいような工夫 (柿むき機の購入など) や、特性を発見し役割をつくる努力をした (力が強いことが判明し、荷持の運搬を任せるなど)。

このような結果、体力・持久力、就労意欲、目標、役割などが向上し、生活が大きく変化しているとの説明をソーシャルワーカーは行った。A さんは、ツールの棒グラフで表されたデータから、「ふーん。今はこんなんか。前よりもよくなってんかな」「ちょっと前のも見せて」と言うので、前回のデータも表示すると、「うわー、前よりもすごい上がってるな。すごいな」と驚く。そして、「たしか、広がるん見れたよな」と言い、レーダーチャート (図7) で比較した。すると、「うわー広がってる、広がってる。なんか、嬉しなるな」と子供のように喜ぶ。また、最近の家庭での様子をたずねられると、「このごろ、何したらええかなって考えるようになってるねん。家にいてる時でもなんか手伝えることないかなって思うようになってるわ」と話す。そして、最近は、近隣住民ともあいさつをかわすようになっていくことが判明する。また、このデータをみた感想をたずねられると、「ほんま、ほんま、こんな感じちゃうかな。こんな感じのような気がするで」と実感を述べる。そして、「これからどうなっていくんか楽しみやな」と話す。

前は、データにほとんど関心を示さなかったAさんであったが、今回は、前回のデータと比較したり、自分の実感とを照合したりするようになってきている。また、データの変容を楽しみにするようになってきている。このようなことから、生活やその変容への関心をもつようになってきていることがうかがえる。点線がアセスメント2回目のデータである。

図7 アセスメント2回目



4. アセスメントにおけるAさんの様子（後期）

・アセスメント3回目（2009年7月初め）

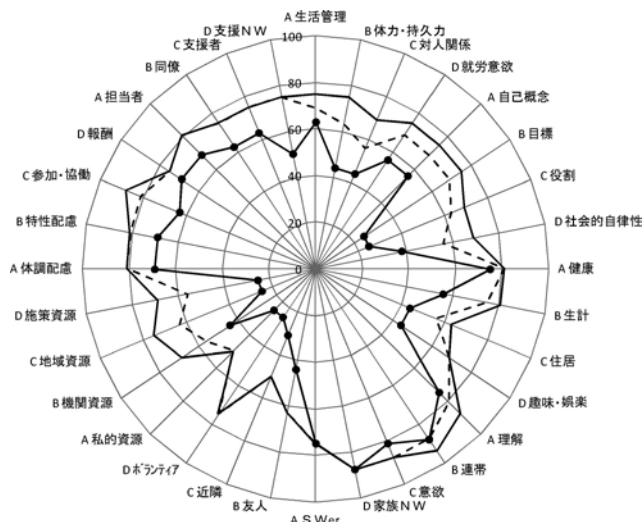
収穫をする際にAさんは、どれを収穫したらよいのかとその都度確認を行っていた。そこで、袋詰めの際に選別するので、間違っても大丈夫であることを伝えるときにも、そばでメンバーが作業を行うことで、迷った時には、すぐに相談できる安心感をもてるようにした。また、一連の作業が難しい場合は、手順の追加をするなどの工夫を行い、役割をもって協働できるような支援を行ってきた。

Aさんは、アセスメントの結果（図8）を見て、「また、広がったな。なんか、ええ（いい）感じやな」とうれしそうにする。そして、周りを見ながら行動できるようになってきていること、細かい事にとらわれすぎないようになってきていること、体力・持久力が向上していること、そして就労意欲も向上しているとの説明を受ける。これに対し、「みんなもがんばってるやん。僕も何かしたいなって思うようになってるわ。チームやからな」「前はこんなと違うたわ。前やったらまちごうたらあかん（間違うといけない）」と思ってせえ

へんかった（しなかった）けど、ここやったらまちごうても怒られへん（ここなら間違ってもおこられない）から、1回やってみようかなって思うようになってるねん」と話す。また、カレンダーに活動日の印をつけているということが判明する。そして、アセスメントのグラフを印刷すると、家族に見せると言って、大事そうに持って帰る。

今回は、データが広がっていることをある程度予想していたようであった。そして、ソーシャルワーカーにたずねられる前に活動での様子や以前と現在の自分を比較するようになってきている。また、活動が安心できる場になっており、就労意欲が向上していることをAさんも自覚し、喜びが生まれていることを再確認している。実線が3回目のアセスメント結果である。

図8 アセスメント3回目



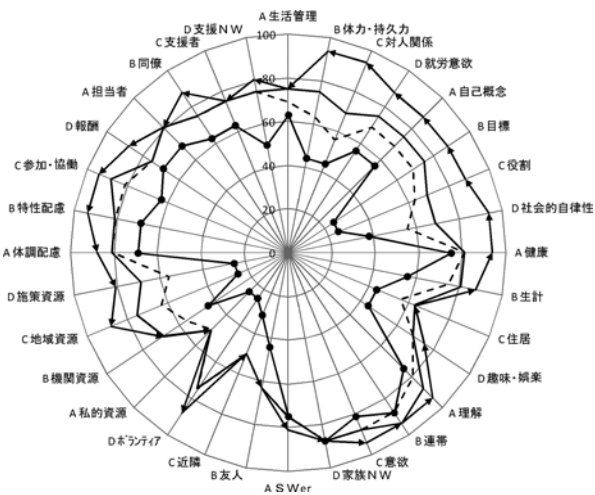
・アセスメント4回目（2009年10月初め）

休憩時には収益を増やすための相談を行うことが多くなり、Aさんにも意見を求めるようになってきた。また、地域住民が作業中に通りがかった際には、メンバーがAさんと一緒にあいさつをするようにし、さらに、イベントで販売する商品の提供協力を呼びかけるなどの地域住民への働きかけも行った。

グラフ（図9）を見て「やっぱり広がってるな。そうやと（そうだと）思った」と、予想していた様子であった。そして、「この対人関係ってなんでこんなに広がってるん？」とたずねる。最近、自分の言いたいことばかり言わないで他人の話もよく聞き、受け答えのかみあうことが多くなってきたことや、地域住民ともあいさつをするようになってきていることなどの

説明を受け、とても納得する。そして、「体力のここ(ところ)は、これよりもちょっと低いかもしれないな。このくらいとちゃうかな(違うかな)?」と、画面のグラフ上を指さす。そこで、質問項目の回答を変更してみると、「やっぱりさっきぐらいやな」と話す。また、「生計のここ(ところ)やけど、お母さんからもらうお金の半分は貯金するようにしてるねん。ここでもらったお金は全部貯金してるんやで。来年のこの会費は、ここでもらったお金で自分で払いたいねん。友人のところはまだ低いな。そうなんよな、はっきりゆって友達あんまりおらへん(いない)のよな。これからもうちょっと友達増やしていきたいなあ。住居のここ(ところ)もまだ低いな。家に居ること多いんやから、もうちょっと家の掃除とから庭の手入れとかしてもええな」と、話します。最近の体調を聞かれると、「コーヒーを飲みすぎて気分が悪くなったことから、最近は、コーヒーをひかえてお茶にしているとのことであり、天気の良い日は1万歩ぐらい散歩を始めているとのことであった。また、9月から地域生活支援事業の同行を利用し、ヘルパーと外出するようになっていたとのことであり、家族以外の人と外出できるようになっていることを少し誇らしい様子で話す。そして、最近、何かできそうな気がしてきたということ家族にも話しているとのことであり、一般就労もあきらめてはいないということが判明する。グラフを印刷すると、家でもう1度よく見ると言って、きちんと折る。その後、他の利用者にもグラフを見せながら、「今、こんな感じになってるんよ」と、ポイントの話をしているようだった。

図9 アセスメント4回目



Aさんは、生活全体のみならず構成子についても関心を示すようになったことで、健康に気を配りながら、体力も向上させるために努力しようとしていることがうかがえる。また、自己分析をふまえて今後の具体的な取り組みについても考えるようになっている。

→ が4回目のアセスメントである。

IV 精神障害者就労・生活支援ツールの意義

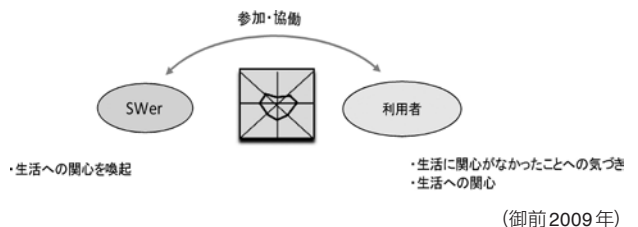
1. 利用者とソーシャルワーカーの協働

アセスメントにおけるAさんの反応から、支援ツールの意義を考察してみる。

まず、1回目のアセスメントにおいて、生活の実感とデータを比べた感想をたずねられると、「ふーん、こんな感じなんかな? ようわからんわ」と答えている。しかし、生活は様々な構成子から成り、広がりがあるという説明を受けることによって、「ふーん、生活なあ。広がりなあ。今まで生活なんか考えたことなかったからな。いろんなもんあるんやな」という反応に変化している。Aさんは、今まで生活に関心がなかったということに気づくとともに、生活や構成子についても少し関心をもつようになっている。

このように支援ツールは、生活というものをビジュアル化することで、利用者に生活のイメージをもちやすくしている。そして、ソーシャルワーカーとの協働によって、利用者が生活に関心がなかったことへの気づきや生活への関心を喚起する材料となっていることがわかる。これを表したものが図10である。

図10 支援ツールを活用した協働



2. フィードバック

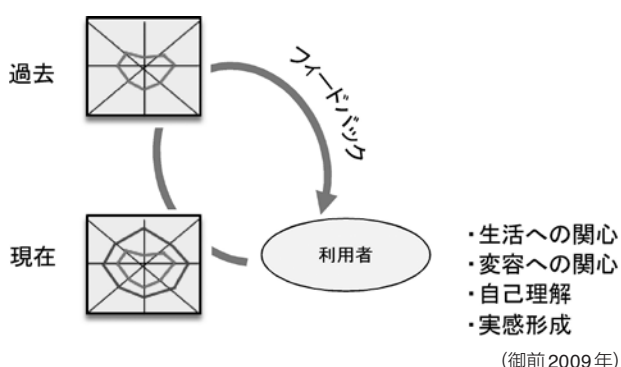
2回目のアセスメントにおいて、棒グラフによるデータを示されたAさんの反応は、「ふーん。今はこんなかな。前よりも良くなってるんかな」という反応であっ

た。しかし、前回とは異なり「これ、確か広がるやつあったよな。あれで見せて」と、生活の広がりそのものへの関心を示している。そして、今回のデータとともに前回のものも表わしたデータレーダーチャートを見て、「わー。すごい！広がったな。こんなになってるんや。なんかうれしなるな」と、素直な喜びを表している。また、自分から役割を担うようになっていたり、この作業を済ませてから休憩にしようという細かい目標をもてるようになっていたりという最近の様子から、役割や目標の部分が前回よりも広がっているという説明をソーシャルワーカーから受けた。するとAさんは、「このごろは、家にいる時でもなんか手伝えることないかなって思うようになってるねん」と家での様子を語りだしている。

また、3回目のアセスメントでは、「みんなもがんばってるやん。僕も何かしたいなって思うようになってるわ。チームやからな」と、協働意識が高まっていることや積極的に役割を担っていきこうとしている自分に気がついている。そして、「前はこんなと違うたわ。前やったらまちごうたらあかんと思うてせえへんかったんやけど、ここやったらまちごうても怒られへんから、1回やってみようかなって思うようになってるねん」と語っている。

このように、支援ツールのデータによって、以前の自分を思い起こし現在の状態と比較し、実感するというフィードバックが行われている。これを図にしたものが、図11である。

図11 支援ツールを活用したフィードバック



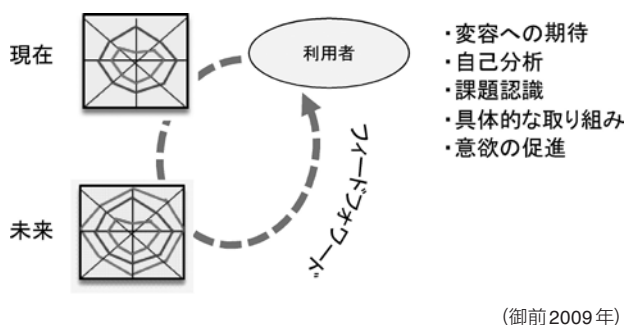
3. フィードフォワード

2回目のアセスメントにおいてAさんは「これからどうなっていくんか楽しみやな」と、漠然とした今後

の変容への期待を見せていた。しかし、4回目のアセスメントになると、「やっぱり広がってるな。そうやと思った」と、自分の生活の様子からデータの広がり予想している。また、「この対人関係ってなんでこんなに広がってるん？」と構成子についての関心を深めている。そして、「体力のところは、これよりもうちょっと低いかもしれんな。このくらいとちゃうかな？」と、画面のグラフ上を指さし、データと実感を照合している。また、「生計のとこやけど、お母さんからもらうお金の半分は貯金するようにしてるねん。ここでもらったお金は全部貯金してるんやで。来年のここの会費は、ここでもろたお金で自分で払いたいねん」と取り組みについての検証を行っている。そして、「友人のところはまだ低いな。そうなんよな、はっきりゆって友達あんまりおらへんのよな。これからもうちょっと友達増やしていきたいなあ」「住居のともまだ低いな。家に居ること多いんやから、もうちょっと家の掃除とから庭の手入れとかしてもええな」と、自己分析から課題を発見するとともに、今後のなりたい自分への思いをめぐらせ、そのための具体的な取り組みについても考えるようになってきている。アセスメント後の活動において、「あっ、対人関係、対人関係」と言いながら自らコミュニケーションに気を配る場面もみられるようになってきている²⁸。

このように、支援ツールを用いたアセスメントの積み重ねによって、利用者が自ら課題を発見し、その課題について具体的な取り組みについて考えることや、自ら変えていきこうとする意欲の向上にも役立っていることがわかる。このようなフィードフォワードを図にしたものが図12である。

図12 支援ツールを活用したフィードフォワード



4. 精神障害者就労・生活支援ツールの意義

精神障害者に対する支援ツールについては、丸山が①ソーシャルワーカーにとっての意義②利用者の参加の意義を整理している²⁹。これらをふまえ、精神障害

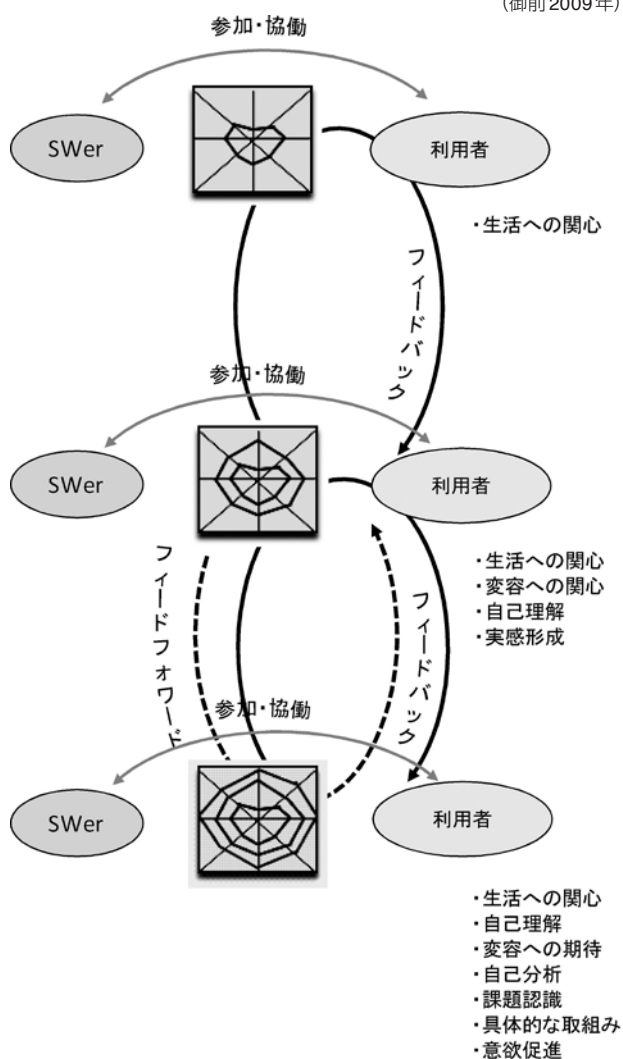
者の就労に焦点をあてた支援ツールの意義をエコシステム視座から質・量・空間・時間の側面から整理したものが、表5である。また、図13は、図10、11、12を統合するとともに利用者の変容に着目し、支援ツールの意義を整理したものである。

表5 精神障害者就労・生活支援ツールの利用者変容に着目した意義

側面	内 容	効 果
質	<p>(漠然としたもの→具体的なもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グラフが以前よりも広がった場合、単純に喜びを感じる。 ・ グラフが広がる期待をもてる。 ・ グラフが以前よりも広がった場合、自信につながる。 ・ もっとグラフを広がるようにしたいという意欲が生まれる。 ・ グラフを見ることにより、地域生活を実感するようになる。 ・ 一般就労に焦りがある利用者にとって、就労は生活の一部であるという実感をもつことができ、一般就労への焦りが軽減される。 	<p>喜び</p> <p>変容への期待</p> <p>自信の向上</p> <p>意欲の向上</p> <p>地域生活の実感</p> <p>焦りの軽減</p>
量	<p>(受動的→積極的)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ソーシャルワーカーとの会話が増えることで、自己理解が促進される。 ・ 利用者からの発話が増えることで、利用者の情報が増える。 	<p>自己理解の促進</p> <p>利用者からの情報提供</p>
空間	<p>(内側→外側)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己理解が深まることで、課題を認識することができる。 ・ 自己理解が深まることで、目標が現実的、具体的になる。 ・ データを介して話し合うことで、利用者とソーシャルワーカーとの認識のズレが修正される。 ・ 自分にしか目がむいていなかった利用者にとって、地域住民などの環境に目を向けるきっかけになる。 	<p>課題認識</p> <p>目標の具体化</p> <p>相互理解の促進</p> <p>環境への関心</p>
時間	<p>(時系列)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生活というものに関心がなかった利用者が、生活やその構成子への関心をもつようになる。 ・ 以前の自分を振り返ることで、現在の実感を確かめることができる。 ・ 以前のデータと比較することで、変化の要因を検証する材料となる。 ・ ソーシャルワーカーの説明を聞くだけでなく、自ら分析や課題発見をし、具体的な取り組みを考えるようになる。 	<p>生活への関心</p> <p>実感の形成</p> <p>変化の要因検証</p> <p>主体性の促進</p>

(御前2009年)

図13 精神障害者就労・生活支援ツールの利用者の
変容からみた意義
(御前2009年)



V おわりに

制度・政策の充実は、大前提ではあるが、それが即刻人びとの幸せな社会生活の実現を意味するわけではなく、生活の中に実効ある福祉として具現化する活動や過程が不可欠である。エコシステム構想における支援ツールは、見えにくい生活というものを人と環境からなる生活情報のデータとしてビジュアル化し、実践に役立てようとするものである。そして、利用者とソーシャルワーカーとの会話を通した協働のもと、そのデータをいかに活用するかということが重要なのである。本稿では、精神障害者に対するソーシャルワークによる就労支援を中心に、支援ツールの意義を考察してきた。そして、支援ツールを精神障害者の就労支援に活用することにより、利用者の自己理解や意欲を

引き出し、その人らしい地域生活を実感することに役立てられる可能性があるという一定の成果を見いだせたのではないかと考えている。

今後は、NPO 法人活動や支援ツールを活用した就労支援によって、精神障害者が実感ある地域生活を送るための手段としての就労支援方法を構築していきたいと考えている。

注：

- 河東田博「2007年度学会回顧と展望 障害者部門」社会福祉学 49 (3) 2008年
- 読売新聞 2010年1月8日 朝刊
- 読売新聞 2009年10月17日 朝刊
- 岩崎晋也「「自立」支援-社会福祉に求められていること-」社会福祉学 48 (3) 2007年
- 高島克子「精神科リハビリテーションを考える (3) 作業所における働くことの意味」病院・地域精神医学 35 (1) 1992年
早野禎二「精神障害者における就労の意義と就労支援の課題」東海学園大学紀要 10 2005年
- 現場の精神保健福祉士には、就労が社会生活を営むうえでの一つの手段にすぎないという考えが根底にあるとされる。(中村佐織「精神障害者の就労援助におけるPSWのアセスメント状況と課題」社会福祉 31 1990年) また、「働きたい」と考えている就労継続支援B型、就労移行支援事業の利用者全員が「働くための活動」を行っているわけではないという調査結果がある。(株式会社浜銀総合研究所「平成20年度障害者保健福祉推進事業 授産施設/就労継続支援B型/就労移行支援事業利用者の就労意向調査と従業員(職業指導員、就労支援担当者)、家族意識調査」2009年
<http://www.yokohama-ri.co.jp/fukushi/pdf/gaiyo.pdf>)
- 竹内愛二は、相互作用、交互作用を含んだ表現として相互影響作用という言葉を用いている。(竹内愛二『実践福祉社会学』弘文堂 1972年 30頁) また、太田義弘は、相互作用と交互作用に加え、螺旋状に変化していく様子を「相互変容関係」と表現している。(太田義弘「社会福祉方法論 講義録 1994年版」) 本論では、この「相互変容関係」を用いている。
- ジェネラル・ソーシャルワークの general には生み出すという generate の意味が含まれている。(太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学 - 理論・方法・支援ツール・生活支援過程 -』相川書房 2009年 237頁)

- 9 Brower, A. M., "Can the Ecological Model Guide Social Work Practice?" *Social Service Review* 62 (3), 1988.
Wakefield, J.C. "Does Social Work Need the Eco-Systems Perspective? : Part 1. Is the Perspective Clinically Useful?" *Social Service Review* 70 (1), 1996.
Wakefield, J.C. "Does Social Work Need the Eco-Systems Perspective? : Part 2. Does the Perspective Save Social Work Incoherence?" *Social Service Review* 70 (2), 1996.
- 10 マートンの「中範囲理論」は、理論と実証を統合させていくための社会学理論である。この理論に示唆を得て、ソーシャルワークにおける理論と実践のかけ橋となる概念を「中範囲概念」とした(太田義弘、中村佐織、石倉宏和『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング -利用者参加へのコンピュータ支援-』中央法規出版 2005年 243 - 246 頁)
- 11 同書など
また、支援ツールのポイント計算の方法については、太田義弘「ソーシャルワーク実践研究とエコシステム構想の課題」龍谷大学社会学部紀要 20 2002 年を参照いただきたい。
- 12 Hartman, A.& Laird J., *Family-Centered Social Work Practice*, The Free Press, 1983, pp.159-171.
Mattaini, M., *More Than Thousand Words: Graphics for Clinical Practice*, NASW Press, 1993
平山尚、武田丈他『ソーシャルワーク実践の評価方法 -シングル・システム・デザインによる理論と技術-』中央法規出版 2002 年
パーカー、J. ブラッドリー、G. (岩崎浩三、高橋利一監訳)『進化するソーシャルワーク 事例で学ぶ アセスメント・プランニング・介入・再検討』筒井書房 2008年 83 - 122 頁
- 13 原文では、「クライアント」となっているが、最近では太田も「利用者」を用いていることから、「利用者」と表記している。
- 14 太田義弘・黒田隆之・溝渕淳「支援ツールの意義と方法」*ソーシャルワーク研究* 26 (4) 2001 年
- 15 Payne, M. , *Modern Social Work Theory: a critical introduction*, Macmillan, 1994, p.136.
秋山薊二「一般システム論とソーシャルワークの枠組み」弘前学院大学一般教育学会誌 3 1983 年
- 16 エコシステム研究会とは、太田義弘、中村佐織などのソーシャルワーク研究者を中心とし、臨床現場にエコシステム視座を具現化するための研究を行っている研究会である。
- 17 精神障害者の一人暮らしは、15.8%とされている。(「精神障害者等調査」<http://www.city.musashimurayama.tokyo.jp/plan/chiikifukushikeikaku-pdf/015.pdf>)
- 18 岩崎晋也、宮内勝、大島巖他「精神障害者社会生活評価尺度の開発」*精神医学* 36 (11) 1994 年
- 19 HONDA「エコ&セーフティドライブ あなたも今日からエコドライブを初めてみませんか?」<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/eco/>
- 20 現在、就労意欲のない利用者への就労意欲の向上には、「就労意欲形成プログラム」によるセミナーや個別面談が行われている(社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 18 就労支援サービス』中央法規出版 2009年 89 頁)。
- 21 相澤欽一「面接と自己決定の支援」松為信雄、菊池恵美子『職業リハビリテーション学 キャリア発達と社会参加に向けた就労支援体系』協同医書出版 2006年 144 頁
- 22 前掲書 9 20 頁
- 23 中村和彦『エコシステム構想にもとづくソーシャルワーカー実践教育の展開に関する研究：精神科ソーシャルワーカー養成教育を一例として』龍谷大学大学院 博士学位論文 2005年 58 頁
- 24 丸山裕子『精神医学ソーシャルワークにおける自律生活再構築アプローチ』大阪府立大学大学院 博士学位論文 1997年 51 頁
- 25 職域拡大を目的として、身体障害者や知的障害者などのパソコン作業を可能にする「就労支援ツール」が障害者職業総合センターによって開発されている。(独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構 障害者職業総合センター『調査研究報告書 No.60 障害者の職域拡大のための職場改善及び就労支援ツールに関する研究』) これとの混同をふせぐために、「精神障害者就労・生活支援ツール」としている。
- 26 構成子の選定についての詳細は、御前由美子「ソーシャルワークによる精神障害者の地域生活支援 -精神障害者就労支援ツールの開発-」*関西福祉科学大学紀要* 13 2009年(現在投稿中)を参照いただきたい。
- 27 目的のない生活を送ることは、障害にも大きく影響するとされている。(Wing, J.K., Brown, G.W. *Institutionalism and Schizophrenia*. Cambridge University Press, 1970)
- 28 自己認識や対人関係は訓練では効果は上がらないとされている。(岡上和男『精神障害者の地域福祉』相川書房 1997年 116 頁)
- 29 丸山裕子「精神医学ソーシャルワークの実践過程とクライアント参加—その意義と方法—」*社会問題研究* 47 (2) 1998 年